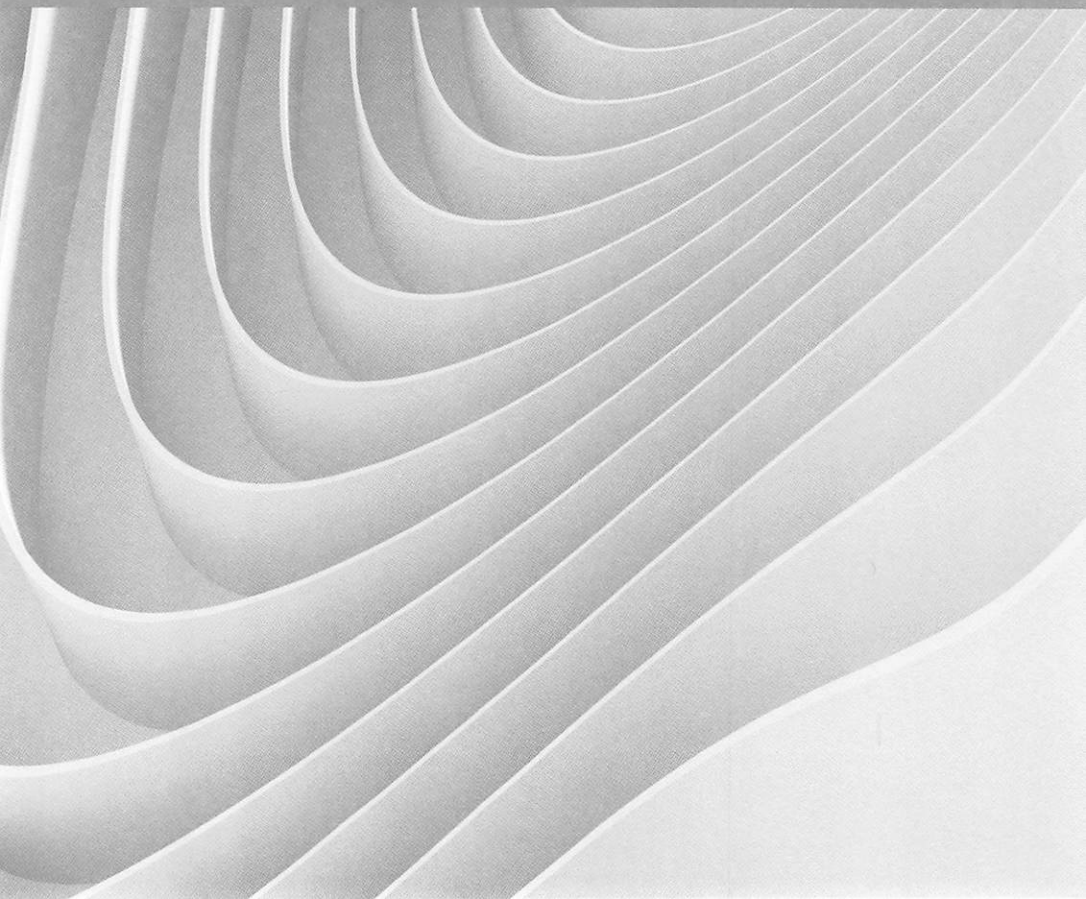




効果的な英語コミュニケーション技法

Introduction of Achieving the Desired Results in English

金徳多恵子



まえがき

ITの急速な発展によりグローバル化している現代社会では、英語を使ったコミュニケーションが不可欠になっている。これからの時代に活躍したいならば、教養や趣味のための英語ではなく、実際に「使える英語」を習得する必要がある。本書は、正確でわかりやすい「使える英語」を習得し、効果的なコミュニケーションをしたいと望んでいる方を対象に執筆したものである。

「使える英語」イコール「話す英語」という風潮があるようだが、実社会ではいくら立派な仕事や研究をしても書いて発表しないとその価値は認められない。また、インターネットやEメールの普及によって、「書く英語」によるコミュニケーション能力が必要不可欠となっている。本書で述べたことは「話す英語」にも参考なるが、「書く英語」のコミュニケーション能力の育成にも役立つと確信する。

効果的にコミュニケーションをするには目的(purpose)と対象(audience)を適切に捉えることである。英語を使って仕事をするときには、常にWhat is the purpose?と自問する。かつて、「日本人の書いた文書は下から読め。大切なことが最後に書いてある」ということばをアメリカの大学で耳にしたことがある。使う英語はこれではいけない。実用英語は、まず目的をBe direct!に提示しなければいけない。また、対象となる相手によって、同じ内容でも伝え方を配慮する必要がある。相手を考えて、相手が理解できるような適切なことばを選び、情報を正確、明確、簡潔に伝えること、つまりreader friendlyの考え方が大切である。特に、ビジネスコミュニケーションにおいては相手の心象を考慮し、相手から好意的なfeedbackをもらえるような語調(tone)を使うことにも注意したい。

本書では、英語を使って効果的にコミュニケーションをするために必要な基本的なルールを語や文のレベル、Eメール文書、日本人が苦手とされる数字の扱いや句読法を中心に述べた。

本書は5章から構成されているが、どの章から読んでもよいように編集してある。

第1章 「語の選択法」

明確で適切な情報を与えるために、語の定義法をはじめ、語や句の選択の要点と注意すべき用法を述べた。また、特にグローバルコミュニケーションでは注意すべき差別語にも注目した。

第2章 「文章の構築法」

伝える内容が曖昧になったり、回りくどい表現になったりする日本人が犯しやすい問題点をあげ、その解決法を述べた。また、英語文書に不可

欠な論理構成として守るべき順序やパラレルリズムについても述べた。さらに、よい人間関係を維持する上で大切な語調にも触れた。

第3章 「数字：実務で決められた用法」

実用英語では他分野の英文より、数字を使って情報を提示したり、立証したりする必要が頻出するので、正確なコミュニケーションをするための基本的な決まりを述べた。

第4章 「ビジネスEメールの基本ルール」

英文Eメールの基本要素である件名、挨拶文句、本文、結び文句、署名の要点を実例を挙げ、ビジネスコミュニケーションのツールとして重視すべき書き方を述べた。

第5章 「句読点・大文字・略語・記号の用法」

読み手の理解を助け、情報を明瞭に効果的に伝達するために、句読点、大文字、略語、記号の基本的な役割と使用法を説明し、その注意すべき点を述べた。

基本的なルールは理解できても、実際に使えるようになるには練習が必要である。従って、各要点の習得度を確認するために、「理解度チェック」をつけたので力試しをしてほしい。「理解度チェック」の問題に、効果的な英文作成能力を見るのに最適である The Technical English Proficiency Test of the Joint Program in Technical Communication of the University of Michigan and Waseda University (TEP Test) の2級の問題の一部を使わせて戴いた。主催社の日本テクニカルコミュニケーション協会に感謝したい。

本書を書くにあたり、テクニカルコミュニケーション研究の第一人者である早稲田大学名誉教授篠田義明先生の多数のご著書やセミナーから数多くのヒントを得、ご教示も戴いた。先生に心から感謝申し上げます。

本書は拙著『英文コミュニケーション作法』（南雲堂フェニックス）を骨子とし、新しい項や内容を加筆したものである。出版をお許しくださった同社に厚く御礼を申し上げる。また、本書で取り上げた内容の一部には、すでに発表した拙稿に加筆した部分も含まれていることをお断りしておく。本書が効果的なコミュニケーションをするための手助けになれば、この上ない喜びである。

最後に、本書の出版は南雲堂の岡崎まち子さんのご尽力の賜であり、編集に当たっては加藤敦氏に大変お世話になった。ここに厚く御礼を申し上げます。

2012年9月 金徳多恵子

目次

まえがき

第1章 語の選択法

- | | |
|------------------|----|
| 1. 大切な定義法 | 9 |
| 2. 単語の明確な選択法 | 23 |
| 3. 守るべき語と語の相性 | 26 |
| 4. 使用を避けたい多義語 | 29 |
| 5. 注意すべき動詞の名詞化 | 32 |
| 6. 句動詞は1語の動詞を使用 | 35 |
| 7. 読み手が理解できる語を使用 | 37 |
| 8. 不要語に注意 | 40 |
| 9. 数値を効果的に使用 | 45 |
| 10. データを効果的に使用 | 48 |
| 11. 和製英語に注意 | 50 |
| 12. 注意すべき英米語の相違 | 54 |
| 13. 差別語に注意 | 56 |

第2章 文章の構築法

- | | |
|-------------------|----|
| 1. 主要語を主語 | 64 |
| 2. 不要な関係代名詞は削除 | 69 |
| 3. 注意すべき重文 | 72 |
| 4. 無視できない原因・結果の関係 | 75 |
| 5. 守るべき順序 | 78 |
| 6. 大切なパラレリズム | 81 |
| 7. 使い分けよう能動態と受動態 | 91 |
| 8. 大切な語調 | 94 |

第3章 数字：実務で決められた用法

1. 10からは算用数字 99
2. 一文に2つ以上は算用数字 99
3. 比率・百分率は算用数字 100
4. ページ・図・表・章・巻は算用数字 100
5. 単位を伴うときは算用数字 100
6. 小数は算用数字 101
7. 文の始めは綴り字 101
8. 近似値は綴り字 102
9. 数が並ぶときは算用数字と綴り字 102
10. 999,999を超える端数の無い数字は算用数字と綴り字 103
11. 契約書は数字と綴り字 103
12. 日付の月は綴り字 103

第4章 ビジネスEメールの基本ルール

1. Eメールの基本構成と要点 106
 - ・件名の要点 106
 - ・Salutationの要点 111
 - ・Textの要点 111
 - ・Closingの要点 113
 - ・Signatureの要点 113
2. Business Communicationとして重視すべきEメールの要点 114
 - ・正確、明確なMessageの伝達 114
 - ・簡潔なMessageの伝達 116
 - ・論理的なMessageの伝達 118

第5章 句読点・大文字・略語・記号の用法

1. ピリオド 124
2. コロン 127
3. セミコロン 131

4. コンマ	134
5. ハイフン	140
6. 丸カッコ	145
7. 角カッコ	148
8. ダッシュ	150
9. 引用符	153
10. 省略符号	155
11. スラッシュ；斜線	156
12. アポストロフィ	158
13. イタリック；斜字体	161
14. 大文字	163
15. 略語	165
16. 記号	169
理解度チェック解答例	172
参考書目	184
日本語索引	188
英語索引	191

コミュニケーションでは、使う単語によって内容が左右されるので、語や句の選択は重要である。この章では、単語を中心に、効果的なコミュニケーションをするための語や句の選択の要点と注意すべき用法を述べよう。

1. 大切な定義法

用語を明確に説明するには、まず、その用語を正しく定義する必要がある。それは一般によく知られていない用語を説明するだけでなく、用語に新しい意味を与えたり、その語の本質を理解してもらうために、はっきりとした意味内容を与えることにある。さらに、書き手や話し手の主観による説明も含まれる。つまり、自分が使う語の意味を限定するときにも定義が必要になる。ちなみに、screwdriver を定義させると、人によっては、

Screwdriver is a kind of cocktail.

(スクリュードライバーとはカクテルの一種である)

と答えたり、人によっては、

A screwdriver is a tool for turning screws.

(スクリュードライバーとはねじを回す道具である)

と定義したりする。同じ語も年齢、性別、経験などが異なる対象者によって、異なる解釈をするよい例といえよう。

したがって、英文を書いたり、口頭で発表したりする場合に、語や概念の定義を明確にすることは、無用な誤解を避けるための不可欠な要素である。

(1) 定義の形式

対象 (audience) や目的 (purpose) によって、定義の形式は異なる。つまり、相手がどの程度その語や概念についての知識があるか、また、相手にどの程度それを厳密に伝える必要があるのかによって、定義の形式が変わってくる。形式ばらない定義としては、同意語や類義語 (synonym) を用いるのが一般的である。

たとえば、

Myocardial infarction is a heart attack.

(Myocardial infarction とは心臓麻痺である)

Bulimia, or the binge-eating syndrome

(Bulimia, つまり、過食症)

のように、a heart attack や the binge-eating syndrome という単語を相手が知っていれば、簡潔でよい。しかし、知らなければ判断できない。また、

Freedom is liberty.

(自由とは自由である)

Sincerity is honesty.

(誠実とは正直である)

では本質的な意味を定義したことにはならない。

Synonym は一般的な定義法としては多用されるが、もっと明確性を要求される場合には、Logical definition (論理的な定義法) と呼ばれる Term = Class + Differentia の定義法が効果的である。

つまり、

Term = Class + Differentia

(定義する語) (定義する語が属する部類) (定義する語と同じ属で他の語と区別される特性)

となる。この公式を用いて、the common cold を定義すれば、

Term = the common cold (普通の風邪)

Class = an infection (感染症)

**Differentia = which causes headache, fever, coughing, and
general discomfort**

(頭痛, 発熱, 咳, 一般的不快感を伴う)

これを文にすると、

**The common cold is an infection which causes headache,
fever, coughing, and general discomfort.**

(普通の風邪は頭痛, 発熱, 咳, 一般的不快感を伴う感染症である)

となる。

明確な定義は効果的なコミュニケーションの中核となり、特に科学技術関係のような誤解が生命の危険にまで及ぶ分野の英文では必要不可欠である。

次に、明確な定義の条件を見てみよう。

(2) 明確な定義の条件

A. Class に代用語を使わない

Class (定義する語が属する部類) に定義する語の内容をはっきりとあらかず語を選ばずに、その代用語を使うと定義が曖昧になる。特に物質や要素を定義するときに、不用意に material, substance, element などの代用語を使う傾向があるので注意したい。

たとえば、「酸素」を定義するときに、「酸素は人間にとって不可欠な物質」と考え、例1のように定義する。

例 1

Oxygen is a *material* indispensable to human beings.

(酸素は人間にとって不可欠な物質である。)

この定義では、oxygen (酸素) = a material (物質) となり、「酸素」の概念がはっきりと浮かんでこない。

より内容を明確にしている例として、英英辞典は次のように定義している。

例 2

Oxygen is a *gas present in the air* that is a simple substance (ELEMENT), is without colour, taste, or smell, and is necessary for all forms of life on Earth.

『ロングマン現代英英辞典』

(酸素は単純な物質 [元素] であり、色も味も臭いもなく、地球のあらゆる生物にとって必要な空気中に存在する気体である)

例 2 の定義では、oxygen=gas (気体) となり、「酸素」の Class が「気体」であることを明確にしている。しかも present in the air (空気中に存在する) という修飾語句を gas に付けて、その特長を述べることによって Class を明確にしている。さらに、a simple substance (ELEMENT), is without colour, taste, or smell, and is necessary for all forms of life on Earth. (単純な物質 [元素] であり、色も味も臭いもなく、地球のあらゆる生物にとって必要である) というように、酸素が他の気体とどのように違っているのかを説明する詳細な Differentia を用いているため、明解な定義になっている。

次の例 3、例 4 も的確な Class と Differentia を使って定義をしている好例である。例 5 は element を用いているが、同格を使って、Class が gas であることを明示しているのでよい。

例 3

Oxygen is a *colourless gas* that forms a major part of the air and that is necessary for most plants, animals, insects, etc. to be able to live, and for things to burn.

『コウビルド英英辞典』

(酸素は空気の大半を構成し、たいいていの植物、動物、昆虫などが生きるために必要とし、また、ものが燃えるのに必要である無色の気体である)

例 4

Oxygen is a *colourless tasteless odourless gas*, most abundant of all elements, existing in air and combined in water and most minerals and organic substances, and essential to animal and vegetable life.

『コンサイスオックスフォード英英辞典』

(酸素は無色、無味、無臭の気体であり、すべての元素にもっとも豊富に含まれて、空気中に存在し、水やたいいていの鉱物や有機物質と結合し、動物や植物の生命に不可欠なものである)

例 5

Oxygen is *one of the non-metallic elements*, a *colourless invisible gas*, without taste or smell.

『オックスフォード英英辞典』

(酸素は非金属性の元素のひとつであり、無色で目に見えない気体であり、味も臭いもしない)

例に挙げたように、論理的な定義法を身につけるには、英英辞書から学ぶことが多い。しかし、英英辞書がすべての語の Class を明確しているとは限らないので、利用に際して注意すべきである。

次に代用語として多用される substance の例をいくつかの英英辞典で検討してみよう。

例 6

Insulin is a *substance* produced naturally in the body which allows sugar to be used for ENERGY, especially such a substance taken from animals to be given to sufferers from a disease (DIABETES) which makes them lack this substance.

『ロングマン現代英英辞典』

(インシュリンは糖分がエネルギーのために使われるように体内で自然と造り出される物質であり、この物質が不足する病気(糖尿病)の患者に与えられるために動物から取り出されるような物質である)

例 7

Insulin is a *substance* that most people produce naturally in their body and which controls the level of sugar in their blood.

『コウビルド英英辞典』

(インシュリンはたいていの人が体内で自然と造り出し、血中の糖分の量を抑制する物質である)

例 6 と例 7 は Insulin の Class が *substance* を用いているため曖昧であり、insulin の属する概念は次の例 8 や例 9 の定義の Class のように a hormone (ホルモン) としたほうが的確である。

例 8

Insulin is a *hormone* secreted by islets of Langerhans in vertebrates and controlling passage of sugar from blood to tissues.

『コンサイスオックスフォード英英辞典』

(インシュリンは脊椎動物にあるランゲルハンス島 [インシュリンを分泌する膵臓の細胞群] によって分泌されるホルモンであり、血液から細胞組織への糖分の流れを抑制する)

例 9

Insulin is a *hormone*, produced by the islets of Langerhans

of the pancreas, that regulates the metabolism of glucose and other carbohydrates.

『ランダムハウス英英辞典』

(インシュリンは膵臓のランゲルハンス島によって造り出され、ブドウ糖や他の炭水化物の新陳代謝を調整するホルモンである)

B. Class に「もの」「こと」を使わない

Class はできる限り一語一義に絞ること、つまり、Class が広範囲になればなるほど曖昧度が高くなる。しかし、日本語の定義でも「雲は空に浮かび、白く見えるもの」とか「噂とはそこにはいない人を話題にして、あれこれ言うこと」というように「こと・もの」という曖昧な Class を使っていることが多い。「雲」=「氷晶」であり、「噂」=「話、または情報」という明確な Class の捉え方が望ましい。日本語の影響のせいか英語で定義するときにも日本人の多くが、Class に thing を使う傾向がある。

例 10

A blender is a *thing* which makes a liquid out of solid foods.

(ミキサーは固形の食物を液状にするものである)

とすると、blender の概念が明確につかめない。

そこで、英英辞典を参照する。

例 11

A blender is a *machine* used in the kitchen for mixing liquids and soft foods together at high speed to form a smooth liquid substance.

『コウビルド英英辞典』

(ミキサーは液体とやわらかな食物を速いスピードで混ぜ合わせ、口当たりよい液状の物質にするために台所で使われる機械である)

例 12

A blender is a *small electric machine* used in the kitchen for making solid foods into soups, juice, etc.

『ロングマン現代英英辞典』

(ミキサーは固形のをスープやジュースなどにするために台所で使われる小型の電気で動く機械である)

A blender の Class として、『コウビルド英英辞典 (初版)』は a machine を、『ロングマン現代英英辞典』は a small electric machine を用いて、より具体的な Class を示している。しかし、machine は代用語であるので、a blender の Class は、an electric kitchen appliance の類が望ましい。「機械・道具」を定義するときに machine や device を無意識に使う人がいるので注意したい。「機械・道具」をあらわすには machine, device, tool, instrument, apparatus, equipment, utensil, gadget などがあり、正しく使い分けることにより、Class が明確化できるのである。

C. Class を大まかに分類しない

Class に a kind of . . . , a sort of . . . , something like . . . , someone like . . . のように大まかな分類をする人が多い。これは相手に推測を強いることになり、推測によって、読み手、または聞き手との意志の疎通が崩れ、大きな誤解の元となる。会話なら聞き手が理解できない場合、その場で質問できるが、書く場合には、一方通行になりがちだから、この曖昧さは避けるべきである。

先に述べた Screwdriver is a kind of cocktail. (スクリュードライバーとはカクテルの一種である) は Class を明確にして、次のような定義をするとよい。

例 13

Screwdriver is a *mixed alcoholic drink* with vodka and orange juice.

(スクリュードライバーとはウォッカとオレンジジュースを使った混合酒である)

D. Class に関係詞を使わない

Sushi is what I like best. (すしは私が一番好きなものである) や *Sunday is when* I am happiest. (日曜日は私が一番幸せなときである) または *Hokkaido is where* I was born. (北海道は私が生まれたところである) のように英語学習の過程で関係代名詞 *what* や関係副詞 *when, where* の使用に慣れ親しみ、それが原因となって安易に次のような定義をすることが多い。

例 14

Tokyo Dome is *where* many events such as baseball games, concerts, and shows are held.

(東京ドームは野球の試合やコンサートやショーのようなたくさんのイベントが行われるところである)

Tokyo Dome=*where* の不成立であり、例 15 のような Class を選択すべきであろう。

例 15

Tokyo Dome is a *stadium* for events, exhibitions as well as games.

(東京ドームは試合と同様にイベントや展示会のためのスタジアムである)

E. Class に適切な修飾語を欠かない

修飾語が付くことによって語の内容がより明確になることは当然であるが、Class に付ける修飾語の有無によって定義の資質が決まる。

例 16

A cabin is a house.

(キャビンは家である)

A cabin が a house では class が大まかすぎる。例 17 のように適切な修飾語句が house に付くことによって、明確な定義になる。

例 17

A cabin is a small roughly built usually wooden house.

『ロングマン現代英英辞典』

(キャビンは簡易的に建てられたふつう丸太造りの小さな家である)

例 18

A cabin is a small house, especially one made of wood in an area of forests or mountains.

『コウビルド英英辞典』

(キャビンは森や山に建てられた丸太造りの小屋である)

Class に付く修飾語は small だけだが、Differentia によって、Class が明確化されている。

例 19

A cabin is a small house or cottage, usually of simple design and construction.

『ランダムハウス英英辞典』

(キャビンは小屋、つまり、ふつう単純な設計や構造の山荘である)

Class に付く修飾語は small だけだが、cottage という synonym の使用と Differentia によって、Class の曖昧さを補っている。

F. 曖昧な Differentia を避ける

曖昧な Differentia は Class を特定化できないので避けるべきである。

例 20

A teller is a person *who works at a bank.*

(金銭出納係は銀行で働いている人である)

Differentia が「銀行で働いている」だけでは、teller がどんな person (人) なのか特定できないので曖昧である。したがって、例 21 や例 22 のような Differentia を Class につけることが明確な定義する方法の 1 つである。

例 21

A teller is a person *employed to receive and pay out money in a bank.*

『ロングマン現代英英辞典』

(金銭出納係は銀行でお金の受領や支払のために働いている人である)

例 22

A teller is a member of a bank's staff *concerned with the direct handling of money received by and paid out by the institution.*

『ウェブスター英英辞典』

(金銭出納係は銀行で受領し、支払うお金の直接的な処理に関係する銀行員である)

ただし、例 23 の定義のように、明解な Class を用いることは明解な Differentia を Class に付けることよりも定義の資質には重要ことであることは忘れてはならない。

例 23

A teller is a *cashier* in a bank.

『コウビルド英英辞典』

(金銭出納係は銀行の現金収支係である)

G. 打ち消しを避ける

「楽観主義者とは悲観主義ではない人」とか「悲しみとはうれしくない状態」などと打ち消しを用いて定義をすることは、語や概念の本質を相手に考えさせることになるため避けるべきである。

例 24

Holding is *something you should not do in sports*.

(ホールディングとはスポーツではいけないことである)

Class に something という曖昧な語を使っている上に、Differentia に打ち消しを用いてため holding がどんなものなのか理解できない。したがって、次のような定義が望ましい。

例 25

Holding is *the illegal obstruction of an opponent, as in football, basketball, or ice hockey, by use of the hands, arms, or stick*.

『ランダムハウス英英辞典』

(ホールディングとはフットボール、バスケットボール、アイスホッケーにおいて、手や腕や棒を使う、敵に対する反則妨害である)

H. Circular definition は避ける

Movement is the act of *moving* or condition of *being moved*. のように定義すべき語やその派生語を使って定義すると、circular definition (堂々めぐりの定義) になる。言葉が繰り返されているだけで、全く意味がつかめないことがあるので注意が肝要である。

例 26

Input is information *inputted into a computer*.

(インプットとはコンピュータにインプットされた情報である)

とすると、Input と inputted が同じ語であるために良くない。

そこで、

Input is information *properly coded for feeding into a computer*.

(インプットとはコンピュータに入力するために適切にコード化された情報である)

のように定義すべきである。

英英辞典ではスペースの関係で、次の例 27 や例 28 のように定義すべき語を使って定義している例を散見する。しかし、circular definition は、語や概念が明確に把握できないばかりでなく、不注意と思われたり、真剣さを欠いた文になるので避けるべきである。

例 27

A stapler is a usually small hand tool for driving *staples* into paper.

『ロングマン現代英英辞典』

(ステープラ [ホッチキス] とはステープル [ホッチキスの針] を紙に打ち込むためのふつう小さな手道具である)

例 28

A stapler is a special device used for putting *staples* into sheets of paper.

『コウビルド英英辞典』

(ステープラ [ホッチキス] とはステープル [ホッチキスの針] を数枚の紙に打ち込むために使われる特別な道具である)

理解度チェック (1)

【大切な定義法】の要点を基に、次の間に答えなさい。

(1) 次の語を定義しなさい。

1. a banjo
2. a bottle opener
3. blood
4. a nail

(2) 次の定義の曖昧さを指摘しなさい。

1. A job is something hard to do.
2. Monday is the day when many people feel blue.
3. A radio is an apparatus that you use to listen to radio programs.